

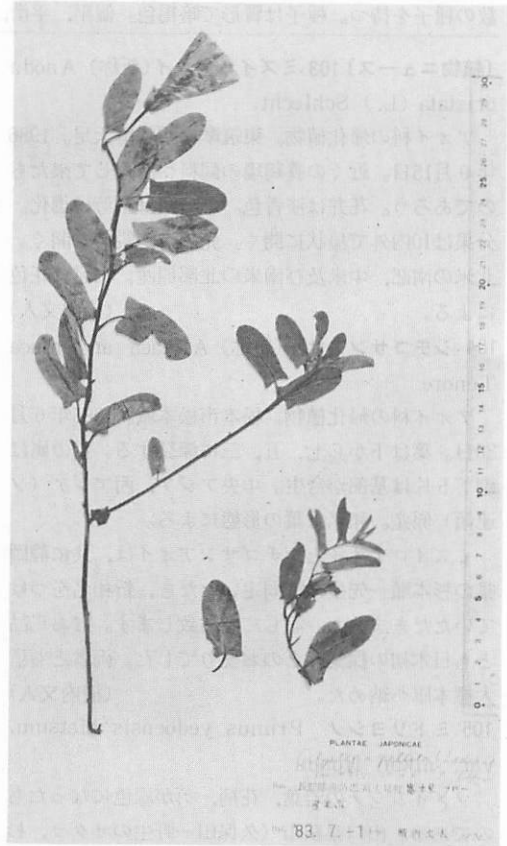
タチヒルガオが長野県に帰化する

高橋 秀男・横内 文人

H. Takahashi & F. Yokouchi: On a new naturalized weed, *Calystegia pellita* (Ledeb.)
G. Don in Nagano Prefecture

筆者の一人横内文人は、1976年6月に松本市県にある松本県ヶ丘高校のグラウンドのフェンスに絡んで生えるヒルガオに似て、著しい有毛の一種を採集した。横内の父横内斎(1980)は、ヒルガオの有毛の一品と認め、ケヒルガオ *Calystegia japonica* Choisy f. *pilosa* Yokouchi f. nov. と名づけ、非公式に発表し、さらに信濃植物誌(1983)のリストにも収録した。再び横内文人は1983年7月に長野県富士見町富士見駅の金網に絡みついている同一種を採集し、筆者の一人高橋秀男に再検討を依頼した。高橋は外国産と推定し主に中国の文献にてでているヒルガオ類との比較検討をして、タチヒルガオではないか? と疑問符をつけたまま回答した。横内は長野県植物ハンドブック(1984)にケヒルガオを載せ、付記として疑問符をつけたままタチヒルガオを加えた。その後に高橋は、国立科学博物館に収蔵されている標本で比較検討をした結果、タチヒルガオ *Calystegia pellita* (Ledeb.) G. Don であることを確認した。中国高等植物図鑑(1974)はタチヒルガオの分布域に日本をあげているが、日本にはまだ帰化の確実な記録はないと思われるので報告する。タチヒルガオ *Calystegia pellita* は茎の下部は直立し、蔓状に長く伸びず、葉身は長楕円形または線状長楕円形、長さ5~7cm、幅0.5~1.5cmで鈍頭または円頭で普通は尖らず、基部は切形または円形、ときにやや心形で側裂片は開出しない。葉柄は長さ1~1.5(~2)cm、全体に灰白色の毛に被われる。かく片は広卵形、長さ1~1.2cm、鈍頭。花冠は漏斗形で淡紅色、長さ4~6cm、花柱は長さ1.5~2.5cmある。中国北部、朝鮮北部、シベリア東部に分布し、路傍、荒地、耕作地などに普通に生える。長野県の生育地は何れも人為的な環境であり、明らかに帰化種と考えられるが、その侵入経路は不明である。本種の自生地が主として大陸的な気候下に支配される地域であるところから、長野県は生育の適地と考えられ、注意深く観察すればまだ他の場所でも発見される可能性はあろう。中国には植物体に毛があってよく似た種類に、もう一種 *Calystegia dahurica* (Herb.) Choisy が知られる。この方

は葉は卵状だ円形または卵状三角形あるいは3裂し、葉柄は長さ1~4(~5)cmでタチヒルガオに比べ長く、全体に淡黄色の短い毛がある。 *Calystegia*



タチヒルガオ *Calystegia pellita*

(横内文人, 長野県諏訪郡富士見町富士見 Alt.
950 m, Jul. 1. '83)

dahurica の八重咲きの1品を纏枝牡丹といい、19世紀後半には中国から欧米へ鑑賞植物として伝わっている。日本では原(1957)が根茎を国外から取り寄せて栽植、開花させ、その写真を紹介するとともに、学名も *C. dahurica* (Herb.) Choisy f. *anestia* (Fernald) Hara と新しい組合せをつくっている。しかし、タチヒルガオは日本へ移入された記録はないようである。本稿の執筆にあたり、標

本の閲覧を許された国立科学博物館ハーバリウム
の諸先生方に厚くお礼申し上げます。

文 献

原 寛 1957. 纏枝牡丹が東京で開花した 植物
研究雑誌 32: 313-315.

野田光蔵 1971. 中国東北区(満州)の植物誌
風間書房.

中国科学院北京植物研究所主編 1974. 中国高等植

物図鑑 第3冊 科学出版社

中国科学院中国植物志編輯委員会 1979. 中国植物
志 第64巻 第1分冊 科学出版社.

横内 斎 1980. 長野県に新たに加わる植物 VII
長野県植物研究会誌 13: 10.

横内 斎 1983. 信濃植物誌 信濃植物誌刊行会.

横内文人編 1984. 長野県植物ハンドブック
銀河書房.

〔新刊紹介〕 横内 斎「草木寸景」銀河書房 1986年
12月刊, 定価 2,300 円。

先に刊行された「草木漫筆」に続く、斎氏御子息
の協力になった父思いの結晶である。書名は漫筆と
か寸景などと名付けられているが、実は立派な植物
中心の論文集である。今回発刊された過半は過去に
発表されたものからの再刊であるが、編集の工夫も
妙を得ている。先ず第一部の山岳夜話を読みながら
生前の氏は眺望のよい所で一休すると山の説話をす
る。私は、彼中々の地理の研究家だと感心していた。
二部からは、氏の最も重視していた植物の分類分布
論である。硬軟色々の説明を加えつつ、世に問い続
けた氏の持論である研究で誠に有意義である。20〜
30年も前に発表された古文獻とせず一読をおすすめ
したい。なお70余年間も植物を愛し続けた横内さん
を偲び、かつ信州植物を知るには好個の書物であろ
うと推測される。(清沢)

〔新刊紹介〕 大塚孝一「長野県のシダ植物」B 5 判
160 頁, 1987年 3 月, 自費出版, 3,500 円(〒 300 円)

内容は第1章概説及び研究史, 第2章分類地理学
上注目される種類, 第3章長野県産シダ植物目録,
第4章長野県に分布する暖地性シダ, 第5章長野県
に産するシダの雑種, 第6章主な地域のシダフロラ
と参考文献・参考資料, 標本写真となっている。

掲載されているシダ植物は24科68属 235 種23変種
12品種35雑種計 305 種類で、総ての種類について主
な産地をあげ、標本の所在地, 採集者まで明記され
ている。従って標本を検討するには都合がよい。

またシダ植物の研究者はもとより、これからシダ
植物を研究しようとする者にとって、30地域のシダ
フロラと 220 種の写真を対応することによって、シ
ダ植物が見えてくる手引き書としては最高である。
お申し込みは、著者あて。(宛名は名簿参照)(Y. M)

〔新刊紹介〕 写真・水越武, 解説・清水建美「日本
アルプスの花」A 4 判アート紙 168 頁, カラー写真
345 枚, 講談社発行(1986年), 5,900 円。

この本は北, 中央, 南アルプスの植物写真とその
解説をしたものであるが、この写真のすばらしさに
ひきつけられ、思わず次々と見入ってしまう。造形
的な美しさと共にその特徴をよくとらえ微細な部分
まではっきりとよくあらわされている。この頃写真
による植物図鑑が出回っているが、こんなにすばら
しい写真は殆ど見たことがない。解説も簡潔で要を
得ており解説と写真を併せみるとき初心者にもたい
へんわかりやすいものだと思う。又山岳地図と山岳
別の植物分布目録も11頁に亘って記録されており、
実際に山を歩く人にも少からず参考になるものと思
う。一般の人にも鑑賞用として、また自然を訪ねる
手引書として、極めて広く活用できると思われる。

(S. S.)

〔新刊紹介〕 松田行雄・土田勝義「美ヶ原・霧ヶ峰
の植物」A 5 判, 261 頁, 信濃毎日新聞社発行
(1986), 2,200 円。

いわゆる中信高原は蓼科高原・霧ヶ峰高原・美ヶ
原高原一帯を含む名称である。ここには、山あり、
草原あり、湿原ありで、植物も誠に豊富である。レ
ンゲツツジ、ニッコウキスゲ、マツムシソウなどの
花は、毎年マスコミの話題提供となる。

本書は単なる植物カラー図鑑ではない。植生のあ
らましや植物群落、植物から見た自然などの項目を
起こし、植物の生活の見方を解説している。

ウツクシシャジン、マルバクワガタ、アカギキン
ポウゲ、ヒメバラモミ、エボシザクラ、タデスミレ、
キリガミネヒオウギアヤメ、ハヤザキヒョウタンボ
ク、キリガミネトウヒレンなどのカラー写真は、見
る人の目をうばわずにはおかぬ。(山猿)